

■山形県知事賞■

あらいごはんをくらう

鶴岡市立朝陽第二小学校二年 押野 明純

「ばあちゃん、今日のお昼は、あらいごはんにしてね。」
 わたしは、あらいごはんが大好きです。なつ休みに、
 おばあちゃんのうちにいくと、かならずあらいごはんを
 食べます。あらいごはんの作り方はとてもかんたんで、
 さいこうにおいしいです。わたしにもかんたんにつくれ
 ます。まず、ざるにごはんを入れます。つぎに、つけも
 のやしやけをじゅんびします。それをもって外のいど水
 が出るところにいけます。そして、水を出していきおい
 よくざるのごはんをあらいます。これでかんせいです。
 あとは、手でごはんを食べて、ナスづけを一口食べると、
 もうとまりません。つぎつぎとじゅんばんに、ごはん、
 ナスづけ、ごはん、しやけ、ごはん、キュウリづけ……。
 気がつくと、いつもごはんを食べる三ばいも食べていま
 す。おなかがプーツとふくらんで、うごけなくなるくら

いです。こんなにかんたんで、こんなにおいしいのは、
 ほかにないなと思います。ばあちゃんも

「こでらんねー。」

といつて、もりもり食べます。お兄ちゃんもおにごは
 んつぶをつけながら、むしやむしや食べます。

わたしは、家でも時どきあらいごはんをやってみます。
 だけど、ばあちゃんちで食べる方がおいしいなーと思
 います。お母さんは、

「ばあちゃんちは、いど水だからじゃない？」

といえます。わたしはそれに、外で食べるからおいし
 のかなと思います！

今年の夏休みも、ばあちゃんのうちであらいごはんを、
 何回も食べました。何回食べても、おいしくておいしく
 て、ばあちゃんと、

「こでらんねー。」

といつて、大わらいしました。ばあちゃんのうちで食
 べるあらいごはんは、やっぱりさいこうです。

■山形県農業協同組合中央会会長賞■

にっぽんーのおこぎり

山形市立出羽小学校一年 会田 空翔

ぼくのばあちゃんのなまえは、よねこです。だから、ぼくは、ばあちゃんをねえちゃんとよんでるんだよ。

ぼくは、がっこうにいくとき、田んぼみちをとおります。いねが、きいろで、おこめがたれさがついています。まるで、おじぎをしているようです。いなごもとんでいます。

がっこうのかえりに、田んぼみちをとおるとおなかですいて、ねえちゃんのおにぎりをたべたくなるんだよ。

ぼくが、がっこうから、かえってくるのと、ねえちゃんは、いつも、すぐくおおきなおにぎりをつくってくれます。

おにぎりのなかみは、いつも、べにジャケです。ほつぺがおちるほどおいしいよ。たべるとげんきもりもりになります。ねえちゃんのおにぎりは、にっぽんー。

ぼくは、おにぎりをたべてから、いっぱいおともだちとあそびます。

ねえちゃんは、おこめで、おやつをつくってくれます。

ほしたごはんをあぶらであげたおかしです。あまくて、ちよつとしょっぱいです。そのおかしが、だいすきです。このおかしは、おちやのみにくるおきやくさんも、

「おいしい、おいしい。」
といます。

ねえちゃんは、のこったごはんも、たいせつにします。そして、

「のうかの人が、いっしょうけんめいにつくったおこめだから、たいせつにするんだよ。」

といつもいっています。

だから、ぼくは、きゅうしよくのごはんとおうちのごはんは、のこさないで、ぜんぶたべています。

■全国優秀賞■ ■山形県知事賞■

知恵と努力のバトンリレー

鶴岡市立斎小学校五年 鈴木 彩

私は、小学三年生の時から自由研究として「プランターで稲作」に取り組んでいます。

一年目は、親せきのおばさんや学校の先生に指導を受けたり、本を読んで稲作に取り組みました。その結果、無事にお米を収かくできて大満足の研究になりました。

二年目の去年は、大失敗でした。去年成功したから今年も大丈夫だろうと油断してしまっただけです。種まきの時期も遅くなり、なかなか生長しなくて田植えも遅くなり、学校の行き帰りに見る田んぼの苗は青々と元気そうにしている、私のプランターの田んぼとくらべるととてもみじめな気持ちになりました。

三年目の今年は、絶対に失敗するわけにはいきません。私は色々な本を読んだり、おばさんに相談したりして、育て方を勉強しました。そして、三種類の育て方をして

それぞれの生長のちがいを調べる事にしました。

でも一種類の苗の育ち方が悪くてとても悩みました。そんな時、とてもうれしい出来事と発見がありました。

母の知り合いの農家の人に苗の育て方や、農業についての事を色々聞きに行った時の事です。その家のおじさんや、おばさんは、とても真剣に私の話を聞いてくれて、水の管理や、肥料のあげ方、中干しの仕方などとても親切に教えてくれました。昔と今の農作業のちがいや、昔の庄内平野の様子なども教えてくれました。そしておじさんは、こんな事も言っていました。

「昔は今とちがって農作業もとても手間がかかって、天気の具合や、水害などでまったくお米が取れない年もあったそうさ。おじさんは少し便利になってからの農業しか知らねども昔の人の知恵と努力を受けてついで農業を続けでんだ。」

私はリレーだと思いました。昔の人の知恵や、努力、苦労がいつぱいつまっただバトンを受け取り、そして、また新しい知恵や努力をつめて次の人に渡す。私達が今おいしいご飯をおなかいっぱい食べられるのは、大昔から続いて来たリレーのおかげなのだ気付いたのです。そ

して、おじさんとおばさんの話を聞いて、稲作についてのアドバイスを受けたわたしもほんの小さなバトンだけでなく、それを受け取ったような気持ちになって、とてもうれしくなりました。私は、おじさん、おばさんに教えていただいた方法で自由研究を成功させて、昔の人達の知識や、苦労や、努力を学校の友達や、家族や、私の周りの人達に伝えたいです。それが私にできる「小さなバトンリレー」だと思うからです。そして、これからも、食事の時や、田んぼをながめる時に思い出して、この小さなバトンを大切にしていきたいと思います。



■山形県農業協同組合中央会会長賞■

おじいさんの『おいしい米』を考える

鶴岡市立朝日小学校六年 伊藤 浩司

「よし、苗の芽も出てきたし、田植えの準備するが。」

今年も間もなく、田植えの時期だ。田植え機を洗ったり、田んぼの準備もできたりしたところ、おじいさんがこう言った。でも、今年はずっと様子がちがう。続けて、

おばあさんに、こうたずねていた。

「手術、田植えの後ではだめだろうか？」

おばあさんは、すかさず

「だめだめ。今年は田んぼ、あきらめて休んでくれ。」

「田植えは人に頼む。あとはおれがやる。」

「そんなごととして、農薬いっぱい使っては、買ってくれ
る人を裏切ることになるよ。」

それを聞いたおじいさんが、やっとあきらめる気持ちになつたようだ。ぼくも、おばあさんと同じだ。おじいさんには、しっかり元気になつてから、米づくりに戻つて

もらいたい。何と言っても、おじいさんの作った米が一番おいしくて安全なのだから。

おじいさんの米づくりに対する情熱は、ぼくが一番よく知っている。ただ、たくさんの米を穫り、高い値で売ろうとしているのではない。苗のころから、子どものように手間と愛情をかけて、大切に育てているのだ。五月から九月にかけて、おじいさんはほぼ毎日、家と田んぼを往復する。苗の丈、水の量、病気の有無、いったい今日は、何をしに田んぼに行ったのか、と思うくらい、大切に世話をしている。

そんなおじいさんが、今年は田んぼを休まなくてはならなくなった。おばあさんの、「農薬いっぱい」の言葉に心が留まったようだ。手間をかけて育てる、ということとは、おいしい、良質の米にする、だけのことではなかったのだ。買ってもらう人、食べてもらう人への安心、安全をも考えることだったのである。

農薬や化学肥料により、土地がやせたり、土中に農薬成分が残ってしまうことも心配である。無理をしたことで、大量の農薬を使うことになれば、その「つけ」は来年以降にも残っていく、というのだ。

「おいしい、って言うのは、味だけでなく、作った人の愛情も入ってっからだなやの。」

おじいさんは、そう言いながら仕事をしていた。ぼくも、それを聞いて、おじいさんの手伝いも心をこめてやるようにした。

けれども、今回のおじいさんの決断で、米に対しての思いがもっと深いものであることを知った。自分の米を愛し、食べてくれる家族、そして名も知らぬ消費者の人たちに、安全で体にもよいものを食べさせたい。土、ひいては、ぼくたちが生きる未来の大地を美しく残したい、ということだ。おじいさんの体のことはもちろん、思いも忘れずに、その背中を見つめていこうと思う。手術を終え、無事に退院したおじいさんが言った。

「ちよっと、田んぼ見て来るがの」



■山形県知事賞■

父の教え

鶴岡市立朝日中学校二年 有賀 この美

「暑いなあ、こんなに暑い日の田植えはやんだなあ、へびもいるしい。」

と、私がだらだらしていると父は、

「暑っちえば、苗はいい気持ちで田んぼに落ちつけるし、へびがいる事でねずみを退治する。みんなちゃんと理由があるんだ。」

私はうなずきながら田植えの準備をしている父を見た。

今日の田植えは兄が主役だ。昨日まで父を乗せて働いていた田植機は兄を当り前のように乗せて動いている。

「残りの四枚は、あどお前さまかせるからな、頼んだぞ。」

父の言葉に兄は緊張した顔でうなずいた。最初はゆっくりにそして段々速くなった。でも兄以上に父の顔がきびしくなっていく、

「お父さん、なんでこんなに難しい田んぼ植えらせるな

や、もつと真四角のいい田んぼ残せばいいのに。」

「いいなだ、この田んぼがいいなだ。」

そう言いながらじつと見つめている。機械の近くに行ったり時々何か言いたそうにしているがそれでも黙って見ている。その間、私は母と姉と黙々と働いていた。突然、「そうでねえろや、何やってんなや、良く見てやらねばだめだろ。」

父の声が響いた。今まで黙っていた父が兄に注意し始めた。私はお父さんは意地悪だと思った。難しい田んぼをわざと残してまだ経験の浅い兄に植えさせて、あんなに大きい声で怒って。私は父にいきなりがこみあげてきた。

「なかなかうまいろ、曲がってないし、まっすぐ植わってるろ。」

と兄は得意気に言っていたのに、何も話さなくなった。父に言われっ放しで黙りこんでいる。今日で田植えが終わりなのに父のせいでみんなおもしろくない気分になってしまった。

「なんでや、みんながんばって田植えしているなさ、やりたい事もがまんして手伝ってんなさ、農家なんかあどやんだ。」

私は思ってもいないのに口から出てしまった。なんでそんな事を言ったのか自分でもわからなかった。みんなで食べる一服はとても楽しいし、お父さんの手伝いも好きなのに…。私は私の言葉に涙が出そうになった。その時、母は、

「お父さん、いいかげんにしたらどうだ。お父さんはうまくて当り前。だけど兄ちゃんも精一杯やっているのはわかっているろ。お父さんだって最初からうまくいったわけではなかったらう。」

そう母から言われると、父は少しかっこ悪そうにしていた。

「兄ちゃんなかなかうまいぞ。その調子であど少しだ。頼むぞ。」

兄にかけた母の言葉はその場の空気を軽くした。私はちよつとほつとした。最後の一周で終わりだ。みんな兄に集中した。

「よし出来た。今年もうまい米になれよ。」
家族みんなで田んぼの苗に思いを伝えた。疲れきったみんなの耳に母の声が響いた。

「さあ、今日は外でバーベキューだぞ。」

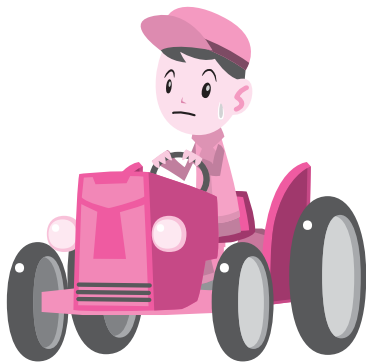
肉を焼きながらみんなで兄をほめていた。兄はうれしそうに、

「来年はもつとうまくやるぞ。今日もなかなかだったけど。」

私は不思議だった。あんなに怒られて、もうやりたくないはずなのに、なんで怒っているんだろう。家族みんなが今日の話をして笑っていた。

今年、父は五十二歳。三十年以上もずっと田んぼにたずさわってきた。「田んぼに定年はない、体が動く限り米を作るぞ。」父の言葉に終わりはない。だけど兄がいつの日か受け継いでいくのだろう。お父さんの田んぼが笑っている。お兄ちゃんの田んぼも笑っている。

「おうい、おいしいお米になれよ。」



■山形県農業協同組合中央会会長賞■

米は偉大だ!!

米沢市立第四中学校二年 我妻 隆羅

私は七月二十八日から八月九日に、国際事業派遣の企画でオーストラリアのバーストに行ってきました。ホストファミリーのお父さんやお母さんや娘さんは、とても朗らかで温かい方々でした。

日本をはなれてオーストラリアの食事にも慣れはじめてきたステイ四日目の日曜日の夕食時のことでした。ステイ先のお母さんに、「日本の味が恋しいでしょ。」と、気をつかってもらい、細長いお米を炊いて出してもらいました。日本と同じ様に炊飯器で調理していて、びっくりしました。炊き上がったお米をまるいボウルに移しかえて、枝豆などを食べるような副食感覚でお米を食べるといふことに、異文化を感じました。食べてみると、冷蔵庫に入りっ放しで水分がぬげ、パサパサになってしまったご飯のような食感でした。普段、日本の米を食べ

慣れている私には、とても違和感を感じるものでした。

その後、日本文化紹介でカレーライスを作りました。カレー粉は私が日本のスーパーからいつも食べているカレー粉を用意し、お米は祖母の実家で作っているお米（米沢のはえぬき）を分けてもらって、持っていました。カレーの方は、普段と同じ作り方だったので簡単に作る事ができたのですが、問題はお米を炊くことでした。以前、お米を分けてもらった時に「炊飯器で炊いたご飯もおいしいけど、鍋で炊いたお米もまたひと味違っておいしいよ。」と言われたので、今回は鍋でご飯を炊くことに挑戦しました。オーストラリアに行く前に何回か自宅で鍋でご飯を炊く練習をしていましたが、家族以外の人に食べてもらうのは初めてのことでおいしいと言ってもらえるか、とても不安でした。しかし、練習の甲斐があつて炊き方は失敗しませんでした。自宅で練習した時よりも粒に輝きが足りないような感じがしました。原因を考えましたが、日本とオーストラリアでは、水が違うからではないかと思いました。

こうして、なんとか出来上がったカレーライスをステイ先のホストファミリーに振る舞ったところ、「これはと

でもうまい!!」と何杯もおかわりをしてくれました。その時に、「カレーもおいしいけど、この日本のお米がとくにおいしいよ。」とホストファミリーのお母さんが言ってくれたことが特に印象的でした。この言葉を聞いた時に、オーストラリアの人から日本の米を食べておいしいと言ってもらえたことは、日本で生まれ日本のお米を食べて育った私にとって、とてもうれしい出来事ではありませんが、同時に、この日本のお米のおいしさを知らない人がまだこの世界にたくさんいるということが、少し残念でもありました。

オーストラリアから帰ってきてから、お米について調べてみると、世界で食べられているお米の大部分が、今回食べたような長粒種だということ、日本人が普段食べている日本のお米というのは、日本人の舌に合わせて品種改良されてきたもので、食べているのは圧倒的に日本人だということが分かりました。

このおいしい日本のお米をつかった料理を世界に広めていきたいと考えています。外国の人達は、日本のお米といえば寿司やおにぎりしか知らない人が多い様なので、それだけではなく、餅やせんべい、おはぎ、赤飯、季節

のかわりご飯など、またお米を粉末にして作ったお米パンやお米うどんなど、お米から生まれたたくさん料理を世界中の人達に深く知ってもらいたいと思いました。

